

【記事等】

軍事の役割は破壊と殺傷だけなのか  
— ヴェトナム戦争後の米陸軍の変革から考える —

岩上 隆安

はじめに

軍事行動には、破壊（destruction）や殺傷（killing）が伴うことが多い。また、破壊と殺傷をめぐる悲劇は、これまでも数多存在する。事実、武力が実際に行使されれば、それに伴う破壊や殺傷により、相手方ばかりでなく、我方にも死傷者ばかりでなく、甚大な損害や莫大な歳出が発生する。このため、歴史的にも「兵者凶器也（『国語』）」、また「兵者不祥之器（『老子』）」と言われて、武力戦は忌避されている。現代でもそれを理由に軍事を忌避する向きもある。

同様に、武力はもとより使わない方が望ましく、使わずに済めばそれに越したことはないと一般には考えられている。しかも、政治、社会、倫理や道德上では如何に生きるかが発想の根底にあるため、殺傷と破壊を伴う武力戦はあくまで非常措置と捉えられている。よって、武力戦を出来得る限り回避するのは、当然の帰結とも言えるだろう。

軍事の役割が破壊と殺傷だけならば、軍事の存在は歴史的にも、また政治、社会、倫理や道德の面から見て受け容れられないものと言えるだろう。他方で、現に多くの主権国家では軍隊が存在して、国民から尊敬を集めている。それは、軍事が単に破壊と殺傷だけを行っている訳ではないということになるのではないだろうか。では、軍事は破壊と殺傷以外に如何なる役割を担っているのか。ここではクラウゼヴィッツの議論を振り返ったうえで、ヴェトナム戦争後の米陸軍の変革を追いながら確認する。軍事理論を確認したうえで、日米同盟のカウンターパートである彼らが敗戦を経て、如何なる変革を果たしたのかを知ることは、80年前に敗戦を経験した我々が今後を考察する際に示唆が得られると考えるからである。本稿では情勢が厳しくなる中、自衛隊法第3条第1項、即ち「我が国の平和と独立を守り、国の安全を保つため、我が国を防衛する」使命をもつ我々が、「戦って勝つ（fight to win）」こと、つまり、有事の陸領域での侵攻部隊阻止の役割以外に今後如何なる役割を担うのかについて考えてみたい。

## 1 クラウゼヴィッツの議論

クラウゼヴィッツは1832年刊行の『戦争論』で、「戦争の手段はただ1つしかない。それは戦い（kampf）である。たとえ戦争の手段がどれだけ多様であろうと、戦争の概念上、常に戦争に現れる作用は、すべて戦いに源を発する」として戦争の手段としての戦いの本質的価値を強調した（クラウゼヴィッツ、74頁）。しかし、彼は同時に「戦いの目的が、必ずしも関連する敵戦闘力の撃滅にない場合、実際の戦いなしに、その目的が達せられることがある」ともして、戦いを戦争目的達成に必要な不可欠とは考えていなかった（同、75頁）。つまり、彼は破壊と殺傷を伴う戦いだけをもって戦争遂行を構想していた訳ではなかった。

そこで彼は戦争を「戦いそのもの（用兵：warfighting）」と「戦いの準備」とに区別して考察して、それらをそれぞれ剣術と刀鍛冶と形容した（同、112頁）。また、区別が必要な理由について、「一方の領域で極めて有能な人物が、他方の領域で全く役に立たず、些事にこだわる人物である例が、如何に多いかを指摘するだけでよい」として両領域の深淵性とともに関独立性を示唆した（同右）。

また、『戦争論』で主として述べられているのは、戦争のうち用兵であり、徴兵、武装、装具の準備、訓練などではない（同、112頁）。このことから同書はその後誤読かもしれないが、例えば、リデル・ハート（Basil H. Liddell-Hart）によって絶対戦争の源泉や戦争の結果として平和を考えていないなどと批判されることになった。但し、士官学校長という以外に戦争準備に深く関わってこなかったクラウゼヴィッツが、用兵以外に「戦いの準備」について一書を著せたかという疑問は残るだろう。

## 2 ヴェトナム戦争敗戦が米陸軍の用兵に与えた衝撃

米国のジャーナリストであるデイビッド・ハルバースタム（David Halberstam）は『ベスト&ブライテスト』で、ヴェトナム戦争当時の米国政権の枢要な地位にいた者たちが、「ヴェトナムの歴史を理解せず、自らの偏見に支配され、己の能力を過信し、軍事的、経済的な力だけを信じて史上稀にみる大破壊を行った」ことを描いている（ハルバースタム、p.5）。しかも彼らは、いずれも米国社会の中・上流家庭に生まれ、優れた教育環境で育ち、あるいは神童と畏れられ、あるいは奨学生として英国に学ぶなど米国の知的エリートであった。

当時、軍は軍で問題を抱えていた。それはヴェトナムでの統合作戦の必要を訴えていたマシュー・リッジウェイ（Matthew B. Ridgway）陸軍参謀総長の

【記事等】（令和7年2月）

退役後、各軍参謀総長は自らの軍種を重視してばかりで、リンドン・ジョンソン（Lyndon B. Johnson）のような威圧的な大統領に、軍の意見を聞かないならばその代価を払う覚悟があるかと迫る力量もなかった（同、pp. 664-5）。それらなどの結果、米軍は累次の大規模な破壊と殺傷を行ったが、北ヴェトナムに勝利することはできなかった。ここを見て、ハリー・サマーズ（Harry Summers）元陸軍大佐は『On Strategy』で「戦闘で勝利していた米国が、何故戦争で敗北したのか」を考察したのをはじめ、米軍は大改革を目指した。

### 3 敗戦後の米陸軍の変革

それは米陸軍では、例えば体制上では1973年の訓練教義司令部（TRADOC: Training and Doctrine Command）の創設であり、戦争遂行上では作戦術の導入などであった（Swain, pp. 147-8）。作戦術は、戦場において戦闘力を使用する方法である戦術が行き詰まったとの認識の下、軍事が戦術を超えて戦勝を獲得するために編み出された概念である。これはまた、軍隊の運用規模拡大に伴って戦場が空間的に拡大したうえに、鉄道、内燃機関、電信、機関銃といった科学技術の進展に伴って、運用に時間的な先行性と内容的な新規性や融通性が求められたことで、従前の戦術を空間的、時間的、内容的に拡大したものとも見なせる。つまり、TRADOCは体制変革だけでなく、訓練や教義開発という意味で、また作戦術の導入は、戦術の拡大という意味で、破壊と殺傷を主としてきた軍事の役割の拡大とも言えるのである。

湾岸戦争終結後、米陸軍には通常戦争の蓋然性は低下したとの認識が広がる一方、現実にはテロや内戦など脅威は多様化した。これを受けて、彼らは作戦術の考察を進めながら1993年に『FM100-5 作戦（Operations）』を改訂した。そこで彼らは対テロ作戦、災害救援、人道支援や平和維持活動といった活動を戦争以外の作戦（OOTW: operations other than war）として自らの役割を拡大させた。同作戦は1995年に戦争以外の軍事作戦（MOOTW: military operations other than war）として米統合軍に採り入れられた。これらには破壊と殺傷は多くは想定されないので、これらは軍事の役割は破壊と殺傷だけではないという裏付けになるだろう。

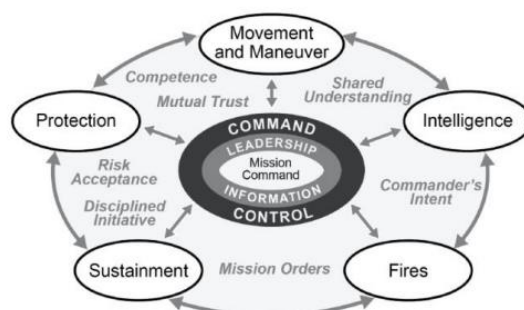
また、作戦レベルでは米陸軍は陸上自衛隊が従来、機動力、火力、防護力としてきた戦闘力（combat power）を2012年にはリーダーシップ及び情報（information）と、ミッション・コマンド、移動および機動、情報（intelligence）、火力、維持、防護の6機能からなる武力戦遂行機能（WFF: warfighting functions）を含む8要素に再定義した。ちなみに、情報（intelligence）は、敵、地形、民事の理解を促進する機能なのに対

## 軍事の役割は破壊と殺傷だけなのか（岩上）

し、情報（information）は、知識管理と情報管理によって戦闘力の使用を最適化する機能とされている。さらに、米国国防大学のフランク・ホフマン（Frank Hoffman）特別研究員は2021年に、従前破壊だけであった軍事の機能に機動による転位（dislocate）、電磁波による劣化（degradation）やサイバーによる認識不能化（disorientation）を加えた撃破機構（defeat mechanisms）を提唱している。さらに戦術レベルでは、彼らは2023年に、戦術任務タスクとして27種を規定した。『FM3-90 戦術（Tactics）』付録Bによると、戦術任務用タスクとは、任務を分析して5W1Hに書き下すミッション・ステイトメントの“何（what）”に当たる部分である。ここでは、破壊（destroy）のほか、火力打撃（attack by fire）、無力化（neutralize）、制圧（suppress）といった破壊と殺傷が想定されるもののほか、迂回（bypass）、続行（follow and assume）、針路変更（turn）といった必ずしもそれらが想定されないものが含まれている。

このように破壊と殺傷を主体として戦争を遂行してきた米陸軍は、ヴェトナム戦争の敗北を経験して、体制変革とともに作戦術を導入し、その役割も戦略、作戦、戦術レベルで破壊と殺傷以外にも幅広く定義している。

図：指揮統制と武力戦遂行機能



出典：Headquarters, Department of the Army,  
ADP 6-0 Mission Command: Command and Control of  
Army Forces (July 2019), p. x より抜粋。

## 4 使命達成のための具体的な役割とは

クラウゼヴィッツは200年前には、戦争における軍事の役割の広さを認識していた。また、現代では米陸軍もヴェトナム戦争の敗戦後にそれを認識した。ここだけを見ても軍事の役割は破壊と殺傷だけではなく、多岐にわたっていることが認識できる。しかも、現代では、例えば超限戦、ハイブリッド

戦争や複数領域作戦（MDO）のように従前戦闘が生起すると想定されていた戦場が、陸上、海上、空中から宇宙空間ばかりでなく、インターネットなどの仮想空間や人間の認知にまで拡大している。また、時間もサイバー、極超音速兵器の実用化やAI、ビッグデータの導入により、ニアリアルタイムでの判断や行動が求められることで短縮している。さらにそこでは、行動主体が軍隊から民兵や民間軍事会社（PMC）、延いては外交、情報、経済にまで拡大したうえに、手段もサイバー戦、電子戦、心理戦、認知戦といったノンキネティック手段が活用されている。つまり、軍事では活動する際に認識すべき空間が拡大し、相手の行動に反応するための時間が短縮し、さらには行動する主体と活用する手段の多様化とともに、非軍事の戦争行動や非戦争の軍事行動といった従前には軍事として認識されない行動への対応が、その役割として捉えられるようになった。そう考えると、軍事の役割は今後拡大する方向にあると言えるだろう。特に破壊と殺傷は、現代戦環境、つまり活動空間の拡大、反応時間の短縮や行動主体と活用手段の多様化の中で、今後はその相対的な比重が低下するのかもしれない。

他方で、現下のウクライナや中東のように、戦いの中から破壊や殺傷が消え去ることもないだろう。何故なら、破壊や殺傷は戦いに不可欠な属性であり、破壊と殺傷の存在こそ軍事と非軍事を区別する本質的なものだからである。であれば、我々には戦いを何としても回避する努力は必須である。しかしながら、戦いには相手があり、我々が相手を支配できない限り、万が一の事態は想定し得る。よって、それに備えることも必須となる。

そう考えれば、今後、国防という使命達成のため、我々には有事の陸領域での侵攻部隊阻止の役割は必要であるが、それだけでは不十分で、それに加えて、何を、如何にするのかを改めて考え直す必要があることが分かるだろう。換言すれば、我々には今後、通常戦争での役割に加えて、次なる戦争の様相は如何なるものかを構想しながら、そこでの勝ちとは如何なるものかを定義すること。また、そこで勝つための外交、情報、経済などといった非軍事主体との連携が必要であることがまず認識できるだろう。そして、その連携の中で陸上自衛隊が如何に行動するのかを具体化しないとその行動が適切にならないとの洞察も理解できよう。

では、それは具体的に何か。それは、米陸軍の変革の言葉を借りれば、陸上自衛隊として「戦争以外の軍事作戦」とともに、「武力戦遂行機能」と「撃破機構」とは何かを明確にしたうえでの、「戦術任務用タスク」の再定義は一案になるだろう。但し現代戦の特性を加味すれば、そこには軍事の本来的使命である「戦って勝つ」役割だけでなく、国際平和活動、情報戦、災

## 軍事の役割は破壊と殺傷だけなのか（岩上）

害救援、人道支援や民心獲得といった活動、サイバー戦、電子戦、心理戦、認知戦への対応や AI 技術、量子技術といったサイバー技術、高性能マイクロ波（HPM）技術、電磁パルス（EMP）技術といったノンキネティック手段の活用といった「戦わずして勝つ（win without fighting）」を重視することも必要となると私は考える。

### おわりに

軍事の役割を破壊と殺傷だけと捉えるのは、過度の単純化である。確かに、単純化には問題を明確にする効果はある。しかし、単純化は、その過程で多くの事実を捨象しており、それだけで物事のすべては明らかにできない。他方、軍事には破壊と殺傷は含まれないと捉えるのは、戦いの歴史から目を背けている。我々には国防のどこかでそれらが生起するとの覚悟とそれへの準備が必要である。

情勢が厳しくなる中で、我々には今後、過度の単純化を戒め、戦いの歴史に立脚した総合的で、実際的な役割を見出すことが必要なのだろう。その変化がここまで激しいとむしろ、それが「我が国の平和と独立を守り、国の安全を保つため、我が国を防衛する」初一手とさえ思える。

（これは個人の見解であり、防衛省、陸上自衛隊の見解ではない。）

### 【参考文献】

岩上隆安「陸上自衛隊への新概念の専門部隊導入について： 「次なる戦争」の視点からの考察」『戦略研究』31、令和4年。

カール・フォン・クラウゼヴィッツ『縮訳版 戦争論』加藤秀治郎訳、日本経済新聞出版、2020年。

D・ハルバースタム、『ベスト&ブライテスト』、浅野輔訳サイマル出版会、1976年（原著は、David Halberstam, *THE BEST AND THE BRIGHTEST*, (Fawcett books, 1969)）。

Frank Hoffman, "Defeat Mechanisms in Modern Warfare," *Parameters* 51, no. 4 (2021): pp. 49-66.

Richard Swain, "Filling the Void: The Operational Art and The U.S. Army," B. J. C. McKercher and Michael A. Hennessy, *The Operational Art: Developments in the Theories of War* (Praeger, 1996), pp. 147-172.

※ 本稿は、『修親』令和6年12月号に掲載されたものに一部加筆、修正したものです。